

# 消却の間

asitaba@ねこ

## —消却の間

意を決して後ろを振り向くと、すぐ目の前にドアがあった。  
それも、今まで見たこともないような大きなドア。  
見た目は木で、彫刻が施されている。  
何を彫ってあるかは大きすぎてわからないが、彫り跡がとてもきれいだ。  
しかし、もう正直飽きてきている。  
このドアが最後だといいが……。  
そんな思いも込めつつ、ドアノブに手をかける。

引いてみると、ドアノブはガチャッガチャッと鳴るだけで開きそうにない。  
これだけ大きいと相当な力が必要なのだろうか。  
そうになると俺はここから出られない、ということになるが……。  
一呼吸おいて、ドアの開け方を考えた。  
引いてダメなら押してみるか、と実行はしてみたものの違ったらしい。  
パスワードとか鍵とかが必要なのだろうか。  
アイテムの取り忘れだとしたらもう戻る事は出来ない。  
ここから先へ進むことも出来ない。  
俺は、現実に意気消沈して倒れ込んだ。

「……いや、違う」

起き上がりながらそう呟く。  
寝転がって分かったが、横に溝が入っている。  
これはスライド式だ。  
そうと分かれば、あとは力の限り引くだけだ。  
ゆっくりと横に吸い込まれていくドアを見送り、俺は中へと進んでいった。

入ってすぐ右手には、傘立てが置いてある。  
後ろにはさっきいた空間があるはずだったが、そこはもう真っ暗で何もなかった。

「ここにあるのは傘立てだけか」

傘立てはあるが、中身はゼロだ。  
所持品は前の部屋で全て使いつくした。  
しかし、傘立てだけでは何も出来ないだろう。  
前へ進めば、見えない壁が俺の進入を拒む。

「見えない壁ね……」

俺は傘立てを両手で持ち、目の前の壁に殴りつけた。

思惑通り、バリッ！と激しい音を立てて割れた。  
破片がいくつか飛び散ったが、特に気にすることはない。  
先へ進むべく、壁の向こう側へ入っていく。

「……傘立ても持っていか」

暗さにも慣れてきたのか、少しだけまわりが見えるようになってきた。  
物体の形状がわかる程度だが、何も見えないよりはいいだろう。  
ゆっくり奥に進むと、分岐点らしき部屋へとたどり着いた。  
一つの部屋にいくつもの入口が存在する。  
この中から正解を導きだせと言うのか。  
とりあえず端から順番に見ていこう。  
今までも行き当たりばったりで来たのだ、今さら悩む方がつらい。

一番端の部屋へ入ったのはいいものの、さらに暗くて何も見えない。

「あー……」

変声ガスでも吸ったかのように高い声が出せる。

「誰かいるのか？」

近くから男の叫ぶ声が聞こえる。  
それほど大きな声ではなかったが、それは部屋中に響いた。  
他にも人がいたのか。  
ここに一人立ち尽くしていてもらちがあかないだろうし、いったんここを出よう。

「おーい！」

相手に聞こえるように大きく叫ぶと酷く響いた。  
部屋を出ると、一気に明るい光りが目に入る。  
明るすぎて前方を確認できないほどだ。

「ライトを消してくれ」

「ライトか？ いいだろう。」

その言葉を合図にライトは消され、元の通り辺り一面真っ暗闇と化した。  
ライトをつけていても見えないのなら、それは同じことだろう。

「……見えるのか？」

「全く見えない」

「そうだろうな」

相手の声を頼りに前へ進む。  
来るときも障害物などなかったから、大丈夫だろう。

「……っと」

大きな壁に突き当たった。

「大丈夫か？」

「ああ」

「……ガラスがあって、ここから先に行けないんだ」

「ああ、これか」

これは、さっき俺が壊した……。

「そっちから開けられるのか？」

スイッチでも見つければいいのだけれど、真っ暗で何も見えない今では何とも言えない。

「いや、分からない。俺はそれで壊して入ってきたから」

「俺も叩き割ろうとしたんだ。力が足りないからか、ひびすら入らない」

「こっちから割ってみるか？」

「お願いしますよ」

「一応、離れておけ……」

ずっと右手に持っていた傘立てを頭上に振り上げ、最初と同じように壁に殴りつけた。  
さっきよりも激しく音を立てて割れた壁の向こうには一人の男がいた。

「もうライトをつけてもいいかい？」

「ああ」

光りは下に向けてあるにも関わらず、とてもまぶしい。

「これは光りが強すぎるから、ここに置いておくよ」

「ああ」

その明かりは、さっき俺のいた部屋より先まで届いた。

「行こうか。向こうに部屋があるんだ」

「……女もか？」

「女？」

「俺が話しかける前に女の声が聞こえたんだ。いないのか？」

「それは俺だ。あの部屋に行くと、声が変わるんだよ」  
「そうか、不思議だな」

明かりの灯ったおかげで、見えなかった所も見えるようになった。

「ここは……」  
「案外、広いな」

思ったより、かなり広い空間がそこにはあった。

「これだけあると、また面倒になるな……」

数えてみたが、入り口は十箇所あった。

「端から一つずつ調べていこうとしてたんだが」  
「それがいいかも知れないな」  
「ここだ、俺のに入った部屋は」  
「どれ……………本気か？」  
「不思議だろう？」  
「全くだ」

ギギギギギ

「ん？」  
「やべえ」  
「お前、何勝手に……」

パーン！

「痛っ！」

耳が痛い。

「えっ、ここは……」

何だ、戻ってこれたのか……？